から、右側上部と同様な形状をしている可能性が高い。裏面の墨書は不明瞭であるが、残存している表記より、物品の授受に伴う木簡と考えられる。

⑾は右上部を面取りした板状のもので、左側を欠損している。表面は同じ文字列が二行並び、表裏ともに天地を反転させた文字がある点から、習書木簡の可能性が高い。

⑿は将棋の駒。左右を欠損しており、下部が最も厚い。表裏ともに漆書であり、書体や文字が肉厚であることなどから水無瀬駒である可能性が高い。

⒀は将棋の駒。長方形の平面形態をなし、厚さは一定である。表裏ともに墨書があるが、墨痕が薄れており不明瞭。

⒁は将棋の駒。上部を尖らせた五角形であり、下部が最も厚い。表裏ともに漆で書写しており、文字は肉厚である。書体などから水無瀬駒である可能性が高い。

なお、木簡の釈読にあたっては、大澤研一・八木滋（大阪市立博物館）、古市晃（㈶大阪市文化財協会）、小泉信吾の各氏にご教示・ご協力をいただいた。

9　関係文献

㈶大阪府文化財調査研究センター『難波宮跡北西の調査―大阪府警察本部庁舎新築工事に伴う大坂城跡（その6）発掘調査速報―』（二〇〇〇年）

（本田奈都子・小林和美）

京都・浅後谷南（あさごだにみなみ）遺跡で木簡状木製品出土

本遺跡は竹野郡網野町字公庄に所在し、日本海に注ぐ福田川の東岸丘陵裾部に営まれた集落遺跡である。河口部まで現状では約四㎞を測るが、昭和初期の埋め立て以前は、遺跡近辺まで潟が迫り、中郡盆地へ通じる要衝の地であったと考えられる。

調査の結果、弥生時代から中世に至る遺構・遺物を多数検出した。特に古墳時代初頭から中期にかけての溝からは、多量の木製品や土器が出土している。

奈良時代から中世にかけては、掘立柱建物群・溝五条などを検出した。溝内からは墨書土器三点・緑釉陶器・輸入陶磁器・瓦など、一二世紀頃の遺物とともに、木簡状木製品が出土した。木簡状木製品は長さ二六三㎜幅二五㎜厚さ五㎜、両端に切り込みを持つ〇三一型式だが、墨痕は認められなかった。その他、包含層・土坑から円面硯や八稜鏡などが出土しており、九世紀から一二世紀にかけて公的施設が存在したことを窺わせる。

㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第九三冊　二〇〇〇年　参照）

（水谷壽克）